



秋田県立
能代高校
東京同窓会

会 報

NO. 1 1987.10.2
事務局
〒164
東京都中野区中央5-7-1
株友和
TEL.03-383-2111

あ い さ つ

会長 旧3期 板倉 創造

いよいよ秋冷の候となって参りました。

会員の皆様には、ますます御清栄のことと御喜び申し上げます。

昭和62年度総会開催にあたり、多数の会員の方々とお会い出来ますことは、大変喜びとしなければなりません。

この様な形での総会開催は11年を迎える訳ですが、いわば身内の顔なじみの方々ばかりでございますので、御くつろぎ戴きとうございます。

そして交歓談笑のうちに、この宴を楽しく過ごし、同窓生の実りあるものとなることを祈り、総会に寄せる言葉といたします。

あ い さ つ

名誉会長 旧1期 腰山 巳代治

会員の皆様、ますますご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

おかげ様で本会は、年々発展の一途にありますことは、誠に同慶の至りでございます。

会員相互の親睦と理解を深め、友愛を増し、

I. 広汎な分野において活躍されている諸先輩会員とのつきあいを通じて、視野を広め、情報交

換の場となる総会に。

II. 母校より多数の先生方をお迎えして、和気あいあいとして打ちとける和やかな懇親会に。

会員全員、特に若い年代会員の御意見、御希望を拝聴し会運営に反映したいので、能代高校東京同窓会総会参加を熱望してやみません。

中学校時代の思い出

旧制1期 腰山 巳代治

昭和5年3月、樽子山の旧制能代中学を卒業してから、57年になる。

こし方は茫洋として遥か遠い昔になるが、当時を追憶しながら、思いつくまま申し述べて見たい。

昭和初年当時の吾が国経済は、世界的金融恐慌の嵐が吹きまくる中で、全く深刻な様相を呈していた。産業活動は殆んど停止に近い状況であった。

旧1期卒業生を輩出した昭和5～6年に向け、景気はそのどん底ともいうべき状態になり、企業の殆んどが無配に転じ、解雇、失業、は日をおって激しく、同盟罷業が続発、誠に火の消えたような暗たんたる世相であった。

当時の中学生は、どちらかというとならんと軍人志願者が多かった。世の中が極端に不景気で、皆貧しかったからである。

学校では教練、剣道、修身が正課で、歴史、地理、法経も習った。

配属教官の凛しい姿に憧れ、私も将来将軍になることを夢見て、陸軍士官学校を受験したが、近眼のため希望は達成出来なかった。

昭和6年、満洲事変が勃発、日華事変へと拡大し、やがてそれは太平洋戦争へと突入し、大勢の若い会員が戦死、あたら有為の人材を失ったことは、惜しみてもあまりあることである。

学校では規則は大変きびしかった。服装、身なり、長髪検査は毎朝行われた。酒、煙草はむろんのこと、異性間の交友、デートは厳禁、料理屋、カフェ、喫茶店、ソバヤに於ての飲食は許されなかったし、映画、見せ物は、学校引率以外は絶対に見せない。

生徒の自発的学習を促し、生徒の不断の努力、勉強の習慣付けのため、学校所定の「反省週録」を生徒に書かせ、クラス担任先生のもとへ提出させた。

この努力勤勉の習慣が吾が生涯を通して、私の人間形成に大いに役立ち、感謝している。

貧しい時代であったがよく学びよく運動をした。精力善用するには、運動するよりほかに何も出来なかった時代である。

昼休みでも体操場いっばいにマットや跳箱を拵げて、はねまわったものである。鉄棒のエビ上りができなくて何回もやり直しされ、口惜し涙を流した思い出がある。

後年体操部が全国制覇を幾たびか成し遂げ、オリンピック選手を輩出した源泉は、既にこの頃から芽生えがあった。

体操部生みの親、育ての親である、太田口先生の力があつたことは忘れてはならない。

私は陸上競技と正課の剣道をやったが、鹿渡からの汽車通学であったので、放課後の厳しい練習で遅くなると、太田口先生宅に泊めていただくことがしばしばであった。

今福先生の国語、漢文の授業は厳しかった。が一番身についたと思っている。私は技術屋にしては筆が立つといわれることがあるが、これは今福先生のお蔭で、先生の情熱には心を打たれ、今でも感謝の念を禁じ得ません。

先生は皆きびしかったが、反面温か味があり、新興の活気に満ち、情熱に燃えていたので、71人と数少ない生徒と先生の気持ちが一つに結び合っていた。

旧制1期であるから、立派な能中の校風とか、傳統を築かねばならない。先生も生徒も、心血を注いで団結した。

初代武藤校長はとても厳しい先生で、古武士の風格があつた。質実剛健の校風樹立をよく口にされた。

校訓「至誠力行」の制定は、旧1期生が巣立ってからであるが、今玩味しても誠に立派な教訓と思う。

至誠にして動かざるものはなく、鬼神をも感動せしむるは至誠である。不言実行を尊び、「桃李もの言はざれど、下^{シノ}おのずから蹊^{ミチ}を成す」。黙って実行すれば人がついてくる。

徳のある人の所には、自然に人が集まってくるものだ。

至誠は洋の東西をとわず、昔も今も人間社会の基礎的徳徳であり、政治の根幹である。

「発 揮 会」(旧制八期)

旧制8期 高原 英夫

私達の卒業した年は蘆溝橋事件が起った年でこの事件が日中戦争に発展(拡大)して行った。昭和12年でした。

早いもので今年は卒業50周年に当るので9月6日と7日に50周年記念大会を能代で開催しました。

私達同期生は八期だったので「発揮会」と称して毎年同期生の慰霊祭を戦死した同級生の藤沢君の寺である白竜寺で旧盆を目安に終戦後催して来ましたが、今年は9月6日に行いその夜は青森県岩崎村にある同級生田口君の森山荘に一泊して久しぶりに旧懇をあたためました。卒業以来初めての友も岐阜から来て、懇親会は夜のふけるのも忘れ昔にかえって語り合いました。

私達は100名入学し2学級でしたが卒業は75名でしたので同期生と云うより5年間を共に過した同級生と云う関係でした。日中戦争時代でしたので殆んどの人が兵隊に行った連中で戦死した人も大

至誠力行の母校の歴史と傳統を改めて振り返り、益々の発展を心から念願する次第である。

現代社会に於ても、至誠を以て経営の根本としている企業が多いのも、「誠意は通ずる」からである。

歴史の中に蓄積されてきた、至誠力行、人材育成の開校精神で、新時代の社会に貢献するため、更に自己研鑽に励み、有為な人材となるよう期待してやまない。

分おりましたので生き残った連中で死んだ同級生の霊を慰めると共に残された家族の人を元気付け様ではないかと云う事で毎年白竜寺で藤沢君のお父さんのお寺さんにお願して慰霊祭を続けて来たのです。

今年は去る8月13日本会の会員でした清水良平君が亡くなりました。前の秋田県東京事務所長でした藤田さんの叔父に当る人で早稲田を出て東京海上火災に停年迄勤められ退職後保険会社を作られ頑張っていたのに、と非常に残念です。

毎年の様に1人2人と欠けて行く同級生が居り年賀状が段々と少なくなって行く事は淋しい限りです。

今年の同期会と慰霊祭には20名以上も参加し元気に現役で頑張ってる人、又余生を楽しんでる友ありでしたがお互健康に充分注意して又逢う日を楽しみに別れて来ました。最後に会の皆様の御健勝と会の益々の発展を心からお祈りいたします。

楽士会のこと

旧制11期 安濃 五平

昭和55年秋、当時東京および周辺に在住の旧制11期生12名中8名が箱根に一泊して久しぶりのクラス会を行いました。40年ぶりで逢う者もあり、名前と顔の一致しない者もありでしたが、酔う程に少年の頃にかえり、話題はつきませんでした。

以後、毎年1回は集まって旧交を温めることになり、能上君の発案で標記の会名も決まりました。「タノシカイ」と読みます。生れ年の大正11年と11期の十一から「士」をとり、楽しい士の集いと云うことです。

大体は、会場へ集まって、飲んで、しゃべって解散という形式ですが、昭和57年秋の還暦クラスは、夫人同伴で三島大社でお載いを受け、伊豆で

一泊しましたが、遠く九州から渡辺君も単身で参加して一夜を語り明かしました。副産物としては、奥さん同志の交流ができたことです。

しかし、この数年間に丸山君、雄鹿君の2人が還らぬ人となり、健康上の理由で参加できない者もあり、齢を重ねる毎にさびしくなります。従って、「元気なうちに出来るだけ逢っておこう」がクラス会の解散の挨拶になってしまいました。

尚、在郷の同期の諸君から卒業50周年（昭和65年）に、能代と東京の合同クラス会を開催したいと連絡があったことをつけ加えて現況報告を終わります。

旧制13期（昭和17年卒業）

旧制13期 勝永 金一

我々旧制13期生といふのは、卒業年度が昭和17年で、齢い62、3才になる。

云はば、大抵の人は会社での定年も過ぎて傍系の会社へ横すべりし、或る程度老後の設計も樹て終った頃かとも思はれる。

まだまだと思っていたら我が同輩も随分といい年になったものだとつくづく思はれる。

私共は第二次大戦の始った翌年の卒業で、同期の卒業生は約90名位だったと思ふ。その後病死した者もあり、戦死したものは多分一割位と聞いている。亡くなられた方には心から御冥福を祈らずには居られない。

能代高校も開校60年を過ぎたとの事、我々が卒業した頃の一期生といふのは30才位で云はば人生の青二才といった頃かと思ふ、それが今ではその一期生が75才位になって居るといふのですから能

代高校も随分と深く根をはったものだと思ふ。

私も在京同窓会には度々出席させて貰ってます。年一回乍ら懐かしい皆さんと顔を合はせるのは又格別な思いがあるのですが、やはり当日都合がつかず同期のものが来なかったりすると本当にかっかりするものです。そこで最近になって漸く我々同期の桜が年一回、オレ、オマエの旧交を暖めようではないかといふ事で昨年新宿で一回目の会合を開いたのです。今後は恒例として毎年続けようといふ事にして居ります。

同窓会での先輩後輩の集いもそれなりにいいものだが、同期の集いはザックバラんだし、鼻たれ小僧時代の顔を思い出し乍らの話題には若き血が蘇るものである。

そして最後は軍歌を唱ってしめるといふのも我々年代の共通したならわしになってしまったよう

な気がする。

我々も過去を懐かしがる年代に入ってしまった。

過ぎし日をふり返るのもいゝが、半歩でも前へ進まねばと思ふ此の頃である。

能代・NOW (杉から松・ブナへの景観)

新制11期 宮腰 瑞夫

能代浜に面している黒松林が、朝日新聞による「日本の森100選」にノミネートされてから久しい。開発事業による山林・丘陵地の減少とともに、残された自然林が見直されたからでありましょうか。

かつて、材木町を散策する杉丸太から独特の秋田杉の香りが往来し、木材都市・能代を否応なく感じさせてくれた。しかし、一部を残してもはやない。その木都の変貌ぶりには、毎年、訪れるごとに驚くほかない。

東京から材木商人が訪れたら、能代浜の松林を展望できる恰好の地へ案内するのが良いと、子供の頃、父から言われたことが耳に残っている。社会人になってからこの景観を拝見できるチャンスがあったが、「緑のじゅうたん」と言っても過言ではない。全く素晴らしい自然景観だった。今も変容していないだろうか。

毎年、八月初旬、男鹿半島の名所旧跡・西男鹿海岸線を探訪している。特に加茂青砂から桜島の景観・水質は他を圧倒する。

男鹿をあとにして、八郎潟干拓地中央道路から国道7号線経由で約40km、やっと能代にたどり着くが、近い将来、この南北の道路網の一部が拡張・延伸すると聞いた。延長上には向能代(落合地区)へのバイパスとしての橋梁工事が着々進められている。米代川・出羽丘陵をバックに、モダンな絵画となるようなニューブリッジを完工してほしい。

これまで、能代の街づくりは、南下方向をつづけ、自動車販売会社・レストラン・ショッピング

施設等が進出し、さらに東西連絡網が整備されてきた。そして、いよいよ南北を縦貫する7号線から101号線への連結が完成すれば、南は、銀河連邦としての東大ロケット研究所から始まり能代浜自然林→原子力発電所→能代港→落合レジャー施設群→八森町の白神山地と有望な観光資源が勢揃いする。

これらの連結部分に、耐寒・耐火型のペンションやニューハウス群およびこの貴重なランドスケープを高位置から遠望できるリゾート施設が立ち並ぶ時代が来るように期待している。

今年の夏は、八森町の真瀬溪谷から白神山地のブナ林を見学した。道中で、秋田杉の美林と出会い、ほっそりした円錐の姿、整然と並び立つ美しさには「天然杉」の造形美を訴えられた。また、溪谷から脇にそれると「能代釣倶楽部」のハウスが静かに立っていた。

ブナ林への春秋林道を飾るには勿体ないが、手近かにこれ程の美林が残されていたことが無上の喜びであった。いわゆる「自然」の恵みが乏しくなっている都市生活者にはうらやましい限りの景観・たたづまいではなかるうか。

惜しいかな、ブナ林は濃霧にさえぎられ、朦朧として「クマゲラ」も確認できなかったが、帰路の秋田杉に見送られ深山幽谷を振り返った。冬には日本海の猛吹雪に鍛えられるのだろう。

木材需要としての大栄華を極めた「杉」の時代から、自然休養林・保健保安林としての「松」や、豊かな森の生態系としての大原生林「ブナ」への移行時点にさしかかっているのかも知れない。

(所沢市在住)

総会の“すそ野”を広く

事務局長・旧制19期 小林 肇

「年に1回の同窓会の総会に、もっと若い層の人たちが集まってくるよう“すそ野”を広げたい」
—東京同窓会の事務局長として、いま痛切にこう感じています。

初めに、東京同窓会の近況をご報告しましょう。

事務局で把握している会員は、旧制全部と新制の31期生(27歳)まで。そして、その数は62年9月末現在で2,225名に達しました。もっと若い年代の卒業生や学生まで加えると、いわゆる同窓生の実数は、おそらく3,000名を超えているかもしれません。ともあれ、2,225名の内訳は、旧制が204名、新制が2,021名で旧制の占める割合は、ついに全同窓会員の1割をきってしまったのです。つくづく“時の流れ”を感じざるをえません。

いずれにしても、同窓会員が年ごとに増えているのは心強い限りですが、その半面、心配ごとがないでもありません。総会への出席者の顔ぶれを見ますと、いつも若い人たちがグンと少ないことがそれです。具体的にいいますと、年1回の総会に集まる常連は、旧制と新制の13期ぐらいまで。年齢的には、45歳以上の人たちが3分の2で、それ以下の人たちは3分の1ぐらいにしかすぎません。こんな調子でいくと、先が思いやられるというものでしょう。

そこで、若い人たちに関心を持ってもらうには、まずいまの総会の“功德”をPRしておくほうがいいかもしれません。私自身の経験からいいますと、同窓会の総会は会員どうしが親睦を深めると同時に、後輩が先輩から人生の教訓をうける“人間交流の場”だと思っています。

私には、その意味で忘れられない先輩がいます。日立製作所の元役員をしておられた腰山巳代治さ

んです。腰山さんは、旧制1期の大先輩。本来なら、私などのような末輩は、そばにも寄れない人でした。それが、同窓生ということで、総会でもよく一緒になり、その都度話をかわしては、いろいろ教わることがたくさんありました。例えば…。

確か、10年ほど前の総会でのことでした。腰山さんが突然「小林さん、今日の会社経営の難しさは、どこにあると思いますか」というのです。とっさに返事をしかねていましたら、腰山さんはこういわれたのです。

「あのね、いまはすべての技術は、内外ともに殆んど同じレベルにある。これからの競争はサービスしかない」

雑貨卸しの私の仕事などは、まさにクライアント(顧客)に対するサービスが生命であるだけに、このひとはズシンと身にこたえました。これなどは、お互いに利害関係のない同窓生だからこそ忌憚なくいい合えるわけで、これが同窓会のありがたさだといってもいいでしょう。

もうひとつ、腰山さんからはこんな話も聞かされました。

「人間、40歳までは会社のためにつくせ。その後、50歳までには、いかに社内外の人とたくさんつき合うかが大事。それを、60歳までにさらに熟成させる。この努力が、結果として自己の完成につながり、退職しても広い人間関係を持って豊かな人生を送れます。」

重ねていいますが、こんな親身な話を聞けるのは、やはり同窓会だからこそでしょう。こんな良さがあるのですから、若い人たちにはもっと積極的に総会に参加するようにしてもらいたいです。社会人として、人間としてのふれ合いを、同窓会に求めてほしいのです。

戦 争 の 青 春

旧制18期 森田 繁雄

今年も終戦来42年の記念日を迎えた私達の旧制能代中学に於ける体験は昭和史の戦争を離れて語り得ない。昭和19年2月15日の火災は校舎を全焼し、日課は焼跡片付けから始る。旧淳城小学校の仮校舎に移った頃は既に戦局はガタルカナル島が餓死の島と化し、ミドウェーに於て海軍が主力空母4隻を失い負け戦とは知る由もなかった。学徒動員令が出され全面的に学業放棄して、工場軍事関係の労働力として動員されたのである。私達は一部秋木機械へ、汽車通学の私は同僚と東雲陸軍飛行場へ米代川の鉄橋を渡り毎日通った。ドラム缶の運搬や雑役である。赤トンボ（高等練習機）を油布で掃除するのが楽しかった。操縦桿を握ったりして騒いだものである。重爆の呑龍などが見られた。たゞしヘマをすると全員がデレスケと怒鳴られ、整備兵に殴られた。学校でも当時は上級生が下級生を殴るのは伝統であったので、多少の慣れもあって気にならなかった。現在では一発殴ると暴行罪で損害賠償と云う付録までつく。勤務成績の悪る者が焼跡に残った建物を宿舎にした寮で合宿訓練を命じられた。弱い心身を鍛える名目だ。私もその一人であった。寮監は柔道の須田先生だったが、此処での生活は明るかった。運動あり講義ありで、夜は須田先生の怪談后試肝会もあった。急に腹が痛くなる者もいたが私は二番である。グラウンドの裏道を通り墓場にいき最初の者が置いた鈴を持ってくるので誤魔化しがきかない。真暗で先が見えないのでお化役の先輩の背後から顔を出し慌てさせたことなど懐かしい。先

輩には皆川、深井さん、同輩には鍋谷、潮田君がいた。その頃ビルマではインパール作戦が展開し20万人にも戦死者を出していた。勿論知る由もない敗色濃い情勢だったサイパン、硫黄島と相次いで玉砕し学園にもそのムードが迫っていた。私達学友は予科練や特幹（陸軍）を志願する者が増えた。佐藤、三島、常井君等は予科練へ、私は特幹飛行操縦であった。若鷲の歌を学帽を振って列車に乗込んだ。皆純真だった。特攻隊として志願し空母に体当たりすることが本懐と考へていた。「君の為何か惜しまん若桜散って甲斐ある命なりせば」であった。昭和20年8月末戦争が終わり、復員兵で上野駅は大混雑であった。立川飛行場からの私は偶然にも土浦から復員の三島君と一緒にになった。同級生感激の再会で軍隊から貰ったカンパンを戦災孤児に与へて乾杯した。学園に戻った者は旧18期である帝国軍人最後の特攻生残組でもあった。剣道部は武衛、小松先生を初め小林、大坂先輩から渡辺、坂本、山田先輩に至るまで魅力ある剣士が沢山いた。昭和21年春マッカーサー指令により廃止の浮目にあった。伝統ある剣道部解散に立会いはねばならなかった。敗戦国の無念さを痛感した。既に道具の一部は雑巾にされていた。木刀を部員にくぼって記念とした。今時大戦で250万の英霊が眠っている靖国神社に参拝し平和な現代を感謝せずにはおられない。100年も10年も1日も同じである。即ち人生は線ではなく生甲斐のある点だと聞えてくる。

「もはや戦後ではない」時代

新制10期 穴山 勝良

卒業してから30年もたつと、在校当時のことはあらかた忘却のかなたに消え去ってしまっているが、先般、幹事の方から能高60年に亘る「母校の出来事・国内の文化史」のダイジェスト版を頂いた。

我々新制10期生が在学していた昭和30～31年、及びその前後については次のようにメモされていたので、これをもとに当時の一面に触れてみたい。

母校の出来事・国内の文化史

昭和29年	お富さん・赤胴鈴之助ヒット。
30年 創立30年	●神武景気・コンピューター時代始まる。
31年 体育館建設	●太陽の季節出版 能代第2次大火
32年	●鍋底不況
33年	●万札発行 赤線の灯きえる。 有楽町で逢いましょうヒット。
34年	●皇太子結婚 岩戸景気

これを見て、入学した30年には体操の全国制覇が続き、秋には創立30周年の記念行事を盛大に行われた年。

31年は春休み中に発生した能代第2次大火で在校生にも多数の罹災者が出て暗いスタートであったが、夏のインターハイでは、体操は連覇を続け、併せてバレーボールも全国優勝と、スポーツ面の隆盛と同時に各方面に亘って一層その力を発揮した時期ではなかったかと思う。

又、これを紹介されている文化史を見ると、朝鮮特需の反動で苦況が続いていた景気も、30年に

はようやく立直って世に言う神武景気を迎え、更には、その後の産業構造を根底から大きく変えたコンピューター時代も始まっている。

そして31年に入ると、「経済白書」で「日本経済の成長と近代化」の副題をつけて「もはや戦後ではない」と経済データーは戦前の水準を越えるものが殖えて順風満帆の感があった。

しかし、日本経済の基盤はまだまだ弱く、当時は特に外貨事情が足枷になって景気変動の振幅が大きく、且つ激しい環境下において、翌32年には早くも鍋底不況となり、同年の「経済白書」の副題も「速すぎた拡大とその反省」となっている。

一方、落込みは早い而立直りも早いのが当時の景況の大きな特徴で、33年には「景気循環の復活」と云われて上述の通り12月1日には万円札が発行されて翌年34年の岩戸景気へと、日本経済も一段と大きな力をつけて来た時代だったと思う。

これと同時に進学率は向上したが他方では集団就職も盛んになり始めた時代で、今日云われている過疎問題が既に萌芽していたのではなかったかとも思う。

最後に万円札の話が出たのでご参考までに紙幣の発行についてご紹介すると、

昭和25年1月7日	千円札発行
昭和32年10月1日	5千円札発行
昭和33年12月1日	万円札発行

となっていて、ご存知の通り59年11月1日に現在の紙幣に切替っている。

又、紙幣発行残高とGNPの推移を見ますと	
昭和25年末発行高	4,220億円
全年GNP	3兆9千億円
昭和30年末発行高	6,738億円
全年GNP	8兆8千億円
昭和40年末発行高	2兆6千億円

全 年 GNP	31 兆 3 千億円	昭和60年末発行高	25 兆 5 千億円
昭和50年末発行高	12 兆 6 千億円	全 年 GNP	320 兆 8 千億円
全 年 GNP	149 兆 6 千億円	となっている。	

タブーは政治的な動き

新制1期 鈴木 良夫

過去に1度、同窓会の在り方・運営の仕方をめぐって、かなりエキサイトした議論がかわされたことがあった。昭和41年秋の総会でのこと。たまたま、大先輩である山崎五郎さんの選挙運動とからんでのことだったので、いまも強く記憶に残っている。さて、そのいきさつだが……。

山崎五郎さんといえば、旧制3期生で元参議院議員。昭和51年4月6日に61歳で亡くなられたが、旧制の方はもちろん、新制でも初期のほうなら面識の人が多くはいる。

この山崎さんが、中央労働委員会の事務局長を辞めて、国政選挙（衆院議員選挙）に出ようと準備に入ったのが41年1月。そして、この年6月には能代に新居を構えて、活発な事前運動を展開していた。実際に総選挙が行われたのは42年1月で、山崎さんは惜しくも落選したわけだが、ともかく事前運動の段階では東京の同窓会の間でも「同窓会の総会を開いて山崎さんを激励しよう」という声はほうはいと湧き起こった。当然といえば当然の成行きだったようにも思われる。

総会が開かれたのが41年10月初め。会場は東京・文京区の茗溪会館。このとき、司会をおおせつかった私が「山崎さんに挨拶をお願いします」と発言したとたんに、ハプニングが起こった。「質問がある」と立ち上がった人がいたのである。

「同窓会のなかには、政治的にいろいろな立場の人がいる。それを、特定の政党（自民党）から選挙に出る人に肩入れしようというのは、親睦団体であるべき同窓会の趣旨に反するのではないか」

一瞬、会場の空気はサッと白けた。このあと、事態がどう収拾されたか、こまかいことはよく覚えていない。ただ、いずれにしても「同窓会は政治的に中立であるべきだ」という意見は正論である。表立っては、反論のしようがない。

いまにして考えると、私たちがこうした意見が出ることを予想もしなかったのは、軽率だった。が、それなりの背景があったことも一言、釈明しておきたい。

というのは、当時は同窓会の総会といっても、毎年開いたり開かなかったりで、全く不定期だった。いきおい、同窓会の運営についても、厳密に吟味されることが、ついぞなかったからである。しかし、「雨降って地固まる」というか、これを機に、総会は毎年10月初めに茗溪会館で開かれるようになり、今日に及んでいる。その意味では、41年の総会は東京同窓会の歴史のなかで、ひとつのエポックを画したものでいい。

同窓会の在り方については、このあとも機にふれ折にふれて論議されてきた。基本的には、二つの対立的な意見があった。ひとつは「純然たる親睦団体で結構だ」という意見。もうひとつは「親睦団体といっても、毎年1回集まって、酒を飲んで騒いでいるだけでは意味がない。何か勉強会をやるとか、後輩の就職の世話にひと肌ぬぐとか、いろいろ「事業計画」を持つべきではないか」といった趣旨のもの。

こうした論争をもふまえて、いまの東京同窓会の会則の表現は仲々よくできている。

「本会は、同窓生各位の親睦と相互の繁栄を図り、以って郷土の発展と母校の興隆に寄与するものとする」(会則第3条)

“二つの意見”のどちらとも軍配をあげかねる表現だが、運営上は“親睦団体説”が多数意見。そして、くりかえすが、政治的な中立性を侵すことだけは、絶対とっていいほどのタブーだということである。

手元に資料がひとつ残っている。故山崎五郎さんのあとをうけて参議院議員に当選(51年初当選)した佐々木満さん(旧制15期生)が改選のさい、「佐々木満君を励ます会」が開かれた事がある(54年12月)。このとき、同窓会の小林肇・事務局

長が各期ごとの幹事に出した協力依頼状が、その資料。これを見ると、同窓会の役員が、政治的な中立性を保つことにどれだけ苦労しているか、十分おわかり頂けよう。一部を引用する。

「先日の幹事会において、佐々木満君を励ます会には能代高校同窓会としてではなく、また政党・政派にも関係なく、ただ1同窓生として各期の幹事がそれぞれの期の同窓生に案内状の配布および会費徴収のお手伝いすることに決定しました。従って、同窓生にはあくまでも個人的に、個人の意志で参加して頂きたいのです」

何はともあれ、東京同窓会の円満な運営と末長い発展を心から祈念したい。

生活の知恵

旧制19期 坂本 史郎

五十路の峠を越えた頃から、実年の体型に推移していくのを覚え、以来、過剰エネルギー消費のため、近くのスイミングスクールに通いはじめた。

近年、交通の発達、種々の合理化、機械化、省力化の発展のため日常生活の中で、身体を動かして消費するエネルギーは減っており、運動不足が著しい。さらに食物の過剰摂取と相俟って、エネルギーの過剰摂取がもたらされていると云われている。

私が泳ぎを覚えたきっかけは、5才の時、父に専用の釣舟に乗せられ、米代川の「ガメナカゼ」にはおり込まれてからのことである。小学時代は何時となく幸町衆の一員となっており、橋の欄干から飛び降りては、行き交う人の目を驚かせたものであった。河童と云われる程水に親んで育った私は、クロール、平泳ぎ、横泳ぎ(ノシと云った)は得意なので自負してよいと思っていた。ある日スクールで、言葉も交わしたことの無い女性から、

あなたの泳ぎは非常によいが、足首と膝が悪いので直した方がよいと云われた。要するに足首を曲げることで、膝を締めないで力を抜きなさいと云うのである。

中学時代、体操部員だった私は、毎日の如く先輩に下駄を履くな(足首と爪先を伸ばせという意味)、膝を伸ばせ、肘を曲げるな。と、どなられながら技を身につけた私に、全く逆のことをやれと云うのである。一応は謙虚に受け止め、直そうとしたが「雀百まで踊り忘れず」で、年令も手伝ったこと、そう簡単には直らない。自負は、もともと我流だったのであるから仕方がないと観念している。

年齢を重ねることは神の恵であると云うが、若さを保つことは生活の知恵であると思う。老健でいる人を見ると、何んと美しく、素晴らしいことであろうか、と思う昨今である。

か ん れ き

旧制16期 近藤 誠

【一体これはなんなのだっ！ふざけやがってなにが還暦だっ！なにが満60歳だっ！この俺が忘れていた年齢を再確認させるつもりなのかっ！ 件どもが勝手に集まって、飲んで食ってわいわい大騒ぎして、こちとらは、すっかり肴にされ啞然とするばかり…、面食らっているうちに、訳も解からない孫にまでも「お爺いちゃまあめでとう」とかなんとか言わせて花束をくれた。

こんなことになるのならいつもの赤提灯で、粋なおかみと一杯やって帰るんだった。

しかし、あの連中、俺の弱点を衝いて孫まで出演させて、そんなにしてまで俺のためにセレモニーをするからには、俺もちょっとは考えねばならんだろう…と気がついた途端、シューンとしてしまった。

いいかげんにして、落ち着いて静かにしているとでも言うのか？ エンストを起さぬようにこの付近で充電してくれたのか？ 思案のしどころだ。しかし参った。今、自分を襲っている自解できないこの感情を整理しなければ…とボーッとしているうちに飲みすぎた酒が助けてくれて眠ってしまうことができた。

今朝、遅い目覚めの床の中で考えてみたら簡単なことだと気がついた。昨日と今日とはちっとも変わってはいない。単に年齢60年を重ねただけと単純に考えることにしよう。お前等々に踊らされてたまるものか！ とは言え、親爺の生き方が変わることがないぐらい百も承知の上で、あんな大騒ぎをしてくれたお前え達を、心憎くもまた好きになってしまった。あの一瞬の心の慟哭はあったにしても…。お前え達がどう望もうとも俺はいままでどおり「チョーゴ、レゴレ、チョゴレゴレ…」七夕気分の生き方を続けて行くだろう。皆んな！ 宜しく頼む。

贈ってくれたのが、赤いチャンチャンコではなくて、早稲田カラーのエンジ色のベストだったのがベラボーに気に入ってしまった。

そんなお前達の気遣いに、「やるな！ おぬし等…」 嬉しかったよ。ありがとう。】

※ 還暦を迎えた翌日の日記の転記です。旧制16期生は皆んなこんな年頃ようです。

昭和15年たしか107名入学、A Bの二クラス、昭和20年勤労動員先の相模原陸軍造兵廠で卒業証書が薬半紙謄写刷りの卒業でした。

卒業を待ってくれずに、2年生～5年生の途中で海兵・海機・海計・陸士・幼年・予科練・特幹などで半数を超える同輩が学舎を中断して征かされる時代でした。上級学校への進学者も進学早々予備学生など学徒出陣で、なんとも言い難い時を強いられました。相当の物故者もおります。

卒業までの期間を残して途中で軍途に就かされたため、敗戦後、生残って帰校復学した同期生諸君は、軍隊に駆り立てられたあげくの敗戦で、裏切られた鬱憤と虚無憾に襲われ、忘我自失の一時を母校で過ごしたのかも知れません。そんな時代でもあったのです。

二度と後輩達にあの思いをさせてはならないと云うのが我々同期年代の一致した感情じゃないでしょうか。

それだけに、平和な現在の母校に対する羨望から、母校愛は人後に落ちないものがある筈です。

毎年秋頃、秋田県内、地区別の持ち回りで盛大に同期会をやっていますが、残念ながら東京地区は開らくまでには至っていません。是非実現したいものと思います。6～7名は在京の筈です。

東京同窓会の堅実な発展を祈ります。

小生、公務員退職後、現在民間会社で隠居仕事に就きながら、民生委協・青対委・福祉協・早稲田

町々会会長など、ボランティアで結構多忙の毎日 を過しております。

新制 8 期 生 の 状 況

新制 8 期 八柳 昭義

昭和45年に初めて10名が参加して同期会を作り、それから毎年春と秋に同期会を催し、会員も少しずつ増えてきたので、能代の同期生と協力して、同期生全員の名簿を50年8月に作成、この時の調査で関東地方在住者も急増し、約60名となったが転勤等で多少移動があり現在59名となっています。

51年から東京同窓会に参加するようになり、春に同期会、秋は10月の総会を集まる時にし、その他に毎年関東地区同期会名簿を作って変動を知らせています。

同期会を始めてから17年が過ぎ、同期会の活動は幹事の私が地方へ転動したりしてここ2、3年ちょっと休業状態でいたが、その間に会員を元に

して能代一中、能代二中と中学校の同期会が出来て活動するようになりました。

同期生というのは、卒業した時からもう増える事がなく、年と共に少しずつ減ってゆくばかりです。同期生の誰もが会った時に云う事は、現在どんな状態でいようと、俺、お前と呼び合い気兼ねなく話出来る随一の集まりだと云います。仕事を離れた交際が出来る場や友人が居るといのは貴重なものです。又先輩後輩との付き合いをする事で、仕事上の事などはもちろん、自分の視野を広める事にも役立つものです。同窓生同期生との付き合いを大事にして欲しいものです。

威 気 高 し 新 制 11 期 生

新制11期 太田 勝治

年に一度の東京同窓会の総会には、年々参加者も増え、ますます盛会になって来ていることは大変うれしいことです。

そのような中で、わが新制11期生（昭和34年3月卒業）は、参加者が一ばん多いので、それなりに東京同窓会に微力ですが寄与できる、ことは喜ばしいことです。

新制・旧制を通じて各期それぞれの参加者数は4～5名ですが、新制11期生は15名位の参加者数です。これは出席者全体の10%にもあたります。

懇親会の余興の席では、他の期の方は、いくつかの期をよせ集めない、壇上いっぱいにならないのですが、新制11期生の場合、参加者が15名

位ですので、単独で壇上いっぱいになり、応援歌を歌うのです。

他の期の方々はうらやましそうにしていますが、参加者をここまでふやすことができたのは、やはり、同期生たちの努力があったのです。

今から6～7年位前ですが、東京や近県にいる同期生を中心に会をもとうということになり、宮腰瑞夫君、田中善明君、宮腰興紀君、伊藤正男君その他の同期生達を中心になって123会（ひふみかい）第一回会合をもちました。第一回目の会合が1月23日だったので123会と名づけたのです。

この123会は今まで年一回会合をもち、仲間が仲間を誘い合って今日まで続いております。参加

者は常時15名位です。

この123会参加者を中心にして、東京同窓会にも参加を呼びかけ今日に至っているわけです。

われわれの年代は、仕事の中でも中堅となり、転勤なども多く、例年参加していた者も、遠くへ転勤したりで顔ぶれは少しづつかわりますが、15名前後の参加者がいることは嬉しいことです。

2年前には、創立60周年の同窓会名簿も発行され、新制11期生は、関東地方には約70名位いることもわかりました。彼らの中には、東京同窓会の存在さえ知らない者も多いので今年の総会の案内状は70名程に発送させていただきました。

仕事やその他の事情ですぐ参加できなくても、いつか又、情勢がかわれば、必ず参加できる日も

来ると思いますので、あきらめずにこれからも、案内状だけは出してもらいたいと思います。

わが同期生たちは、昭和15～16年生れですので、46～47歳の働き盛りとなりました。

あのなつかしいふるさとを後にして、すでに30年近くになるろうとしています。光陰矢の如しのたとえ通り、月日のたつのは本当に早いものです。

しかし、久しぶりで会う同期生の顔をみるとまるでタイムトンネルを通過して30年前に逆もどриした感じをうけることさえあります。

今年の総会にも、能高卒業後、初めて会う同期生が参加してくれることを祈ります。そして又、わが新制11期生が一ぱん多く出席し壇上で元気一杯応援歌を歌えるのを楽しみにしております。

能 代 弁

旧制10期 大原 義正

能代弁保存会の設立は、昭和56年につくり実際の活動開始は3年後でありました。

その後、毎年2月頃に「馬かやき」「ハツ目かやき」と「キリタンポ鍋」で酒をくみかわし、酔う程に愈々能代弁による会話がぼんぼんと飛び出して来る、という状態である。

これがまた大変に懐しく、青春の思い出と合わせて自然に若返り、そのまま、わが故郷、能代の人となるのです。

さて、数々ある能代弁の中で最も特徴のあるものに次のような方言があります。

それは「ンダッターイー」(その通りだ)という言葉で、これは製材工場全盛時(昭和10年前後)の清助町新道～材木町～幸町の付近で、丸太原材料を満載した荷馬車の馱夫が常時使った言葉でありました。

この「ダレー」が出ると「ああ、能代の人ですネ」とすぐわかる位の、独特の能代弁であると

私は今だに信じております。

また、次のような言葉も街を歩いているとき、馱夫と荷馬車の馬との対話として、よく耳にしました。

満載の荷馬車が突然止った時

「エーッ、このくされダンペー」(意味は、能代の人は一よくおわかりと思います)とか、「クサレたまぐら」(役立たず)

即ち、「たまぐら」とは大工道具のノミの頭の部分にある鉄輪であって、その鉄輪が腐って使用価値を失ったことを例えて言ったものです。

このような能代弁も、昔は漁師が使っておった名残りの一ツであったそうです。

今年の6月14日に帰能し、昔の街を歩いていると、懐かしさと能代弁の思い出が次から次へと湧いて来て、次第に昭和10年代に戻ったような気がしました。

能代弁保存会の使命は、いつまでも、いくつに

なっても故郷の方言を忘れず、そして、能代弁を十二分に使いこなし、常に若返りの名薬となるよう誠心誠意努める所存であります。

本当に能代弁はいいものですね。

同窓会の諸君、いつまでも能代弁を忘れずに、そして、母校の青春時代と懐かしさの思い出を持ち続けることを切望いたします。

秋田県立能代高等学校東京同窓会会則

第 1 条 本会は秋田県立能代高等学校東京同窓会と称する。

第 2 条 本会は能代高等学校を卒業、又は在籍し、東京及び東京近郊に居住する者は、全てその入会の資格を得るものとする。

第 3 条 本会は同窓生各位の親睦と相互の繁栄を図り、以って郷土の発展と母校の興隆に寄与するものとする。

第 4 条 本会は幹事を置く。但し、人数は制限しない。任期は定めない。

第 5 条 幹事の内より、会長 1 名・副会長 2 名以上・会計 1 名以上を置く。又、名誉会長及び顧問を置く事が出来る。但し、任期は 2 年とし、留任は妨げない。

第 6 条 本会の運営に当り事務局を設ける。

第 7 条 本会の運営一切の事項については、幹事会に一任する。

第 8 条 本会は年 1 回総会を開催する。

第 9 条 本会運営費は、総会開催時に若干各位が納付するものとする。但し、金額に関しては総会開催時に幹事会がこれを定めるものとする。

第 10 条 納付された運営費は返還しない。

第 11 条 本会の会計年度は、毎年 10 月 1 日始まり、9 月末日を以って終る。

母校の出来ごと，日本のあゆみ

大正 14 年	開校，定員 100 名に対し 300 名受験
“ 15 年	校舎竣工
昭和 5 年	71 名卒業，「至誠力行」制定 特急つばめ発車
“ 6 年	3 期生積立金変換ストライキ， トーキョー映画封切
“ 10 年	創立 10 周年 丹那トンネル開通
“ 13 年	15 里強行軍 日中戦争 ゼロ戦飛ぶ
“ 15 年	軍国主義反対と授業を放棄する
“ 16 年	能中報国団結成 太平洋戦争はじまる
“ 19 年	校舎全焼，学徒出陣
“ 20 年	原爆投下（広島・長崎） 終戦 「リンゴの歌」ヒット
“ 21 年	文化，体育部復興 吉武栄一同窓会長となる
“ 22 年	校歌，校章の改定
“ 23 年	校舎再建
“ 24 年	能代南高校と改称新制となる， 能代大火 \$ 360 円
“ 26 年	女子生徒 41 名入学
“ 27 年	10 里強歩復活
“ 28 年	能代高校に改称， 「君の名は」大ヒット
“ 30 年	創立 30 周年， 神武景気
“ 31 年	体育館建設， 能代第 2 次大火 太陽の季節
“ 33 年	一万円札発行 有楽町で逢いましょう 赤線の灯消える
“ 34 年	皇太子結婚 岩戸景気
“ 37 年	下駄ばき禁止， YS-11 飛ぶ
“ 39 年	東京オリンピック
“ 40 年	創立 40 周年， 新幹線開通 パンティストッキング発表
“ 41 年	遠足中止で抗議文， ひのえうま
“ 42 年	体育後援会発足， ミニスカート
“ 44 年	アポロ月面着陸 東名高速開通
“ 48 年	新校舎建設 5 億 5 千万円， 石油危機
“ 49 年	高埕への大移動
“ 52 年	文化部後援会発足
“ 56 年	樽子山に青春の碑建立
“ 58 年	日本海中部地震 M. 7. 7
“ 60 年	創立 60 周年

能代高校東京同窓会のあゆみ

年度	総会	出席	案内状 発送	招待	あ ゆ み
32					後藤氏など有志の方々が東京支部の形で活動が始まる。
41					この年の総会がきっかけとなり、毎年総会を開催し同窓生の親睦をはかろうと決定された。
48					斬新なる理想に燃えた有志が会の発展のため、てこ入れが始まる。
50					東京在住の同窓生は卒業生のための宿泊所などをつくらなければと革新的な意見が出る。
51					役員改選 ◦名誉支部長 腰山(前支部長) ◦支部長 板倉(前副支部長) ◦副支部長 塚本, 柳谷 ◎この年より組織がゆたまる。
52	10/ 8	71		4	
53	10/13	78	400		会則一部改正, 茗溪会館に感謝状贈呈
54	10/21	62	500		名簿作成
55	9/27	56		4	8月末現在名簿登録者 425 名
56	10/ 3	85	445	5	能代高校東京同窓会と改称, ◦役員改選 ◦名誉会長 腰山 ◦会長 板倉 ◦副会長 後藤, 吉田, 河田, 相沢, 栗原, 太田, 高谷 ◦会計幹事 村井, 八柳 ◦事務局 小林
57	10/ 2	93	467	7	
58	10/ 1	88	502	5	名簿作成 ◦役員改選
59	10/ 6	76	565	5	
60	10/18	100	600	6	◦役員改選
61	10/ 3	124	656	4	山田敬三氏講演, 能代北, 能代工同窓生を来賓として招待
62	10/ 2		960		◦役員改選 ◦会報第 1 号発行

東京同窓会会員数

62年8月現在

旧制	年齢	人数(名)	累計(名)	新制	年齢	人数(名)	新制累計	総累計(名)
1	75	4	4	1	57	6	6	210
2	74	7	11	2	56	33	39	243
3	73	4	15	3	55	31	70	274
4	72	13	28	4	54	39	109	313
5	71	5	33	5	53	34	143	347
6	70	3	36	6	52	59	202	406
7	69	4	40	7	51	46	248	452
8	68	7	47	8	50	59	307	511
9	67	8	55	9	49	79	386	590
10	66	3	58	10	48	59	445	649
11	65	9	67	11	47	71	516	720
12	64	17	84	12	46	65	581	785
13	63	7	91	13	45	57	638	842
14	62	14	105	14	44	63	701	905
15	61	22	127	15	43	41	742	946
16	60	11	138	16	42	42	784	988
17	59	20	158	17	41	83	867	1,071
18	58	19	177	18	40	103	970	1,174
19	57	21	198	19	39	67	1,037	1,241
20	56	6	204	20	38	102	1,139	1,343
				21	37	94	1,233	1,437
				22	36	81	1,314	1,518
				23	35	92	1,406	1,610
				24	34	83	1,489	1,693
				25	33	56	1,545	1,749
				26	32	71	1,616	1,820
				27	31	73	1,689	1,893
				28	30	57	1,746	1,950
				29	29	92	1,838	2,042
				30	28	93	1,931	2,135
				31	27	90	2,021	2,225

◎注 新9期以後の会員数は、昭和60年度同窓会名簿を調査した結果の数字です。

あ と が き

会報No.1を皆様のお手許にお届けいたします。名誉会長の腰山巳代治氏よりの中学校時代の貴重な歴史の1コマを伺うことができました。その他会員の方々より玉稿をいただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

本会報は、本会則第3条の「同窓生各位の親睦と相互の繁栄を図り」とありますように、出版の目的といたしました。

今後皆様からの寄稿をお待ちいたしております。また皆様から「会報」へのご意見を伺うことにより、さらに充実したものにしていきたいと考えております。

編集：村木良二（旧14期）

秋田県立能代高等学校
東京同窓会 事務局

〒164 東京都中野区中央5丁目7番1号
株式会社 友和 内

TEL 03～383～2111（大代表）

校歌

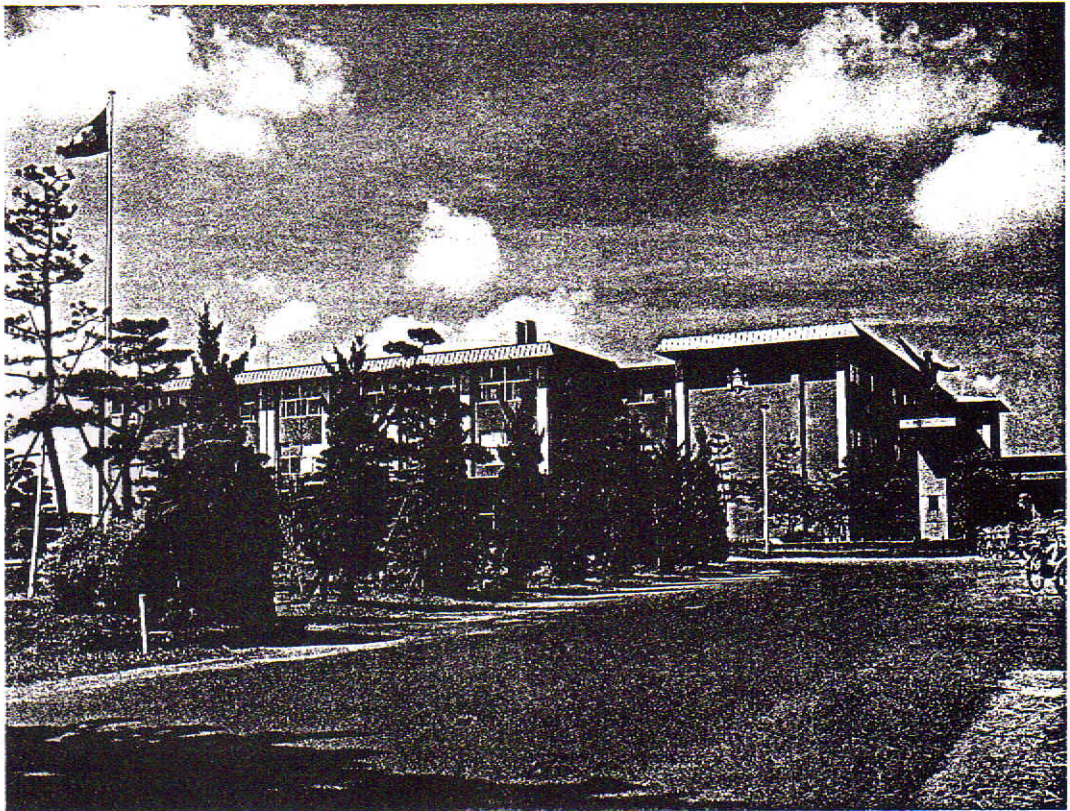
文学博士 藤村 作詞
東京音楽学校教授 岡野貞一 作曲

一、そのかみはるか域^{くも}濶^{ひろ}く
尽きせぬ流れ米代の
水に我等の誓^{ちか}はしき
若き生命を讀へつつ
若き生命を讀へつつ

二、み空にひびく日本海
沖より寄する巨涛^{おきなみ}の
巖^{いわ}つんざく勢に
強き力を学びつつ
強き力を学びつつ
強き力を学びつつ

三、平和の相樽^{すがね}子山
常盤の緑旭日に
映えて我等の麗はしき
清き操をたくへつつ
清き操をたくへつつ
清き操をたくへつつ

四、薫も高き学舎の
象徴^{しご}をかかげひたすらに
学びの道を究めよや
奮へ松陵我が健児
奮へ松陵我が健児
奮へ松陵我が健児



校舎前景

応 援 歌

潮騒さゆる

一、潮騒さゆる北海の岸の
ほとりに地を占めて
たゆまぬ歩み幾年の
陣容なりて時至る

二、見よこの姿この光
奥羽の華とうたわるる

高き誇を身にひめて
立てり能高健男児

三、百練千磨山を抜く
力は内に溢れたり

誰かとどめん若人の
嵐に向う熱血を

四、いざや征衣の袖軽く
奮えてゆくや我が選手

いざや輝く栄冠を
かち得て帰れ我が選手

戦わん哉

一、戦わん哉時至る
我に敵する何者ぞ

松陵健児ゆくところ
陣鼓山河に高鳴りて

征覇の望み今ぞ燃え
ここ昂然の意気高し

二、春雪のべの花かすみ
消えて松陵緑せば

血は湧き立ちて逆まきて
燃ゆるのひに北の子は

利剣に光を仰ぎしか
遂に試練の時至る

三、三年暫しの夢追わぬ
ますらたけをの今日の日

時乾坤に移ろいて
聖者の鐘は今鳴りぬ

健児理想も華やかに
輝く覇業をなさん哉

北羽に吠ゆる

一、北羽に吠ゆる米代のの
碧潤くだけ野をひたし

大河悠々海に入る
ゆかしの国に開をあく

高き理想の若人よ
戦わん哉時至る

二、曇らぬ胸に伝統の
幾星霜の歴史をば

栄冠かち得てかざらんと
刻みし五体は火と燃えて

唯奮進の若人よ
戦わん哉時至る

三、涙をのみて去りゆきし
幾多の友の望みをば

果さん時は今なるぞ
行け松陵の健児

行け松陵の健児
戦わん哉時至る

凱 歌

一、天馬空征く雄たけびに
燃ゆる健児の意気の火や

宴にけがれし巷をよそに
春秋きたへし腕によりて

誉は高し優勝旗

二、北斗ひとたびひらめけば
伏して群星影もなし

勝利をかたどる桂の冠
栄ある凱歌を胸に秘めて

誉は高し優勝旗

日 本 海

日本海の荒波の

燃ゆる血潮のしぶき浴び
雄図目ざして今立てり

健児征馬のゆくところ
敵城潰えて影もなし

勝利 勝利
誉れは高し我等が選手